

## 中間・言葉と沈黙の間

### モラー＝デフルー アニ

言語学者、記号学者 CNRS - パリ 13 ヴィルタニューズ大学・セルジ・ポントワーズ大学 フランス

言葉、辞書…これらがわたしをセシル・アンドリュに結びつける。彼女の作品の中心は、言語について、その重要性と罫についての問いである。文字、アルファベット、語、辞書に関する彼女の《仕事》がわたしたちの出会いと交流のきっかけである。言語学ならびに辞書編纂の専門家であるわたしは彼女の独創的な造形《研究》に感心し、魅了されるほかなかった。《ディスクールの外皮》を破壊したい、本質を覆い隠し包むこの《皮膚》に穴を穿ち、言語の真理に到達したいと強く欲しているからだ。フランスと日本、二つの文化から彼女が確認せざるをえなかったのは、客観的な実在ではなく、言語、文化ごとに多様な記号表現と固有の《世界観》があるということである。われわれは言葉で考える（ベルグソン）、《わたしの》言語の限界は、《わたしの》世界の、《わたしの》現実の、《わたしの》知覚の限界である（ヴィトゲンシュタイン）。言語はコミュニケーションの重要な道具であるが、曖昧で多義的でもある。この造形藝術家が言語と文化を問題にするのは、《われわれの生に言葉が存在する意味を再考》させ、細心の注意をはらうよう促すためである。

彼女が使う素材はなにか？書き言葉とコミュニケーションの道具、すなわち文字、語、辞書 - 語を集積したディスクール！ -、新聞…である。彼女は《ばらし》、切りきざみ、文字を別の文字の上にすべらせ、重ね、読めなくする…。なにかのものが語から失われる。われわれはその不在に気づきはするがそれがどういうことなのか測ることができない。メッセージはつぶやき、口ごもり、微かな音になり、沈黙する…。

ところで、語は語源的にみれば、ささやきに、ほとんど聞き取れない音に結びつくのではなかったか？語は、《音》を意味する *muttum* と、《*mu* という音を発する、ぶつぶつ言う》を意味する *muttire* に由来する。語はもともと、《音を発しない》のようにもっぱら否定形で用いられ、次いで、言葉、言説という意味を持った。曖昧で理解できない言説を避けるために、沈黙しなければならないのか？また、辞書 - 《言うという行為、決意…》を意味する *dictio, onis* に由来する - は、言葉の意味や使用法について言い、明示し、通知する…が、それはある文化のなか、時空のある点においてである。辞書は、社会を映す鏡として、型どおりの言葉を説明し、《規範》を再生産し、共有された文化を総合する。かくて辞書は、言語間のコミュニケーションが困難であることを露呈する。そしてそのことを、セシルは、異なる言語 - 特にフランス語と日本語 - の文字と言葉に向き合うことによって提示する。

見えざる第二の皮膚としてわれわれを包み守り、かつ盲目にする《言説の外皮》、その重圧にまどろみ、裏切られ、隠される実在、それをいかにして再発見するのか？この問題は、色の古い観念 - 《皮膚、色》を意味するギリシャ語の *chroma*、《隠す》を意味する *celare* に近接するラテン語の *color* - に、膚-色または虚-色に、《表面の誘惑》（バシュラール）

に、ものの実在を隠す欺瞞に…流れ込む。言葉によっていかに実在に到達し、実在を表すのか？《中間》色は実在に近づくことを可能にするだろうか？言葉と語と言説の見せかけを、裏切りと罫を避けることができるだろうか？白-黒-灰。紙とその（白紙としての）沈黙の白、空間の白、すき間の白。インクの黒、文字と語と言葉の黒。そして白と黒の結合であり、混ぜ、融け合わす《マグマ》の灰…。このふたつのものの間、この《それでもあれでもない》もの、中性、中心…。ぼんやりと開いた空間の灰。対立し否定しあう要素どうしの衝突：《利休鼠》。白でも黒でもない…。言葉としての黒と沈黙としての白の間。罫、みせかけ、偽装…を避けるための、息をつき反省する時間、総括。藝術家は、《沈黙の点》\* から《井戸》、《声》、《敷居》、《言葉原器》、《脊椎骨》、《クルチュール<sup>2)</sup>》、《供儀》、《合間》…を経て《光の束》にいたるまで、沈黙と反省のなかで、言葉の助けを借りてかつ言葉を超えて、よりよい理解とコミュニケーションをもとめて、解体し、言葉の、色（黒と白）の、言語の、人間の境界を消し去り、連続体を再創造する。言説の罫の外で、時空の外で視線を遊ばせることができる瞑想の場、金の竹林の《沈黙の領域》に呼応する《沈黙の石》\* に見られるように。

(翻訳 川上明孝)

\* カタログ：《沈黙の点》p. 8、《井戸》p. 18、《声》p. 20-22、《敷居》p. 24、《言葉原器》p. 28、《脊椎骨》p. 30、《クルチュール》p. 36、《供儀》p. 34、《合間》p. 38、《光の束》p. 44、《沈黙の石》、p. 12